
真昼の月が見える場所で

デン助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真昼の月が見える場所で

【Nコード】

N4533X

【作者名】

デン助

【あらすじ】

女子校に通う浅葱香月は帰宅途中の近道で殺人現場に遭遇する。その事件は外傷の一切見当たらない不可思議な死因によるもので、通称 眠りの森の魔女 による仕業とされているものだった。学校内で魔女とあだ名される人物に出会い、徐々に日常から非日常へと踏み込んでいく彼女に宿る異能 心を読み取る力によって、やがて事件の裏に潜む存在に気付き始める。積み重なる人の心の声は、彼女をどこへと導くのか。

第一章 眠りの森の魔女

殺人現場だった。

裏路地へと入った途端、二人分の人影が視界に映る。陽の差さぬ暗がりに横たわる、周囲より一層暗く浮き上がる輪郭と、その傍で佇む影だ。俺は咄嗟に隠れ、気付かれなかった事を確認して安堵する。

反射に近い行動で身を潜めた。壁に背をつけている。ものの、しかし。次にどうするべきかと思いつかない。余りにも突然で、不意の遭遇に心臓が慌て、思考は浮ついている。どうすればいいのか、何を考えるべきか。迷うばかりで頭が働かない。

とにかく、深呼吸をした。肌を感じたものから考えていくに殺人にしては静謐過ぎる、という事だ。一見した限りでは、被害者が抵抗した形跡も犯人らしき人影が何かした痕跡も見つけられなかった。

しかし、意識を集中すると途端にその異常性が眼に留まった。あそこに雪の如く漂う 青い光の粒子群 は神秘的、幻想的でありながらも その実、殺人に何らかの形で関係した疑いがある。

それを裏付けるのは、壁越しに顔を覗かせて見た限り、仰向けに倒れているスーツ姿の成人男性が、確実に息をしていないという事である。生きている感じがしない。それが、これまでに何度も死者を見てきた俺には一目で解った。生者と死者の明確な違いが、例えば遠目であっても解るのだ。恐らく、こんな高校生は他にいないであろう。

だからと言って、動揺しないものではない。虚を突かれた遭遇も合わさり、この光景は俺に特別大きな衝撃を与えていた。

痛いくらいに感じる鼓動。嫌な汗までかいている。悪寒、微かに笑う膝、夕暮れの裏通り。唾を飲み込んで、息を潜めた。

状況を整理する。

浅葱香月は通っている女子校から帰る途中、いつも通り近道をしようとして、この事態に出くわした。あれは明らかな殺人行為だ。あの現象、そして静寂の満ちる犯行現場、外傷の一切無い、まるで眠るように殺す不可解な殺害方法。この点から推察するに。

グリーンシス・エラエクト
(霊的作用現象だ)

あれこそ現代の魔法。有り得ざる現象を引き起こす不思議だ。その証拠として常人には見えない蒼い光の粒子と、普通なら聞こえない不協和音が余韻のように満ちている

ここで常識を出すなら、あくまで何も知らない一般人ならば警察に連絡するか、何も見なかった事にして逃げるかする所であるが、俺はこうした事例の詳細を知っているだけに、下手な身動きが取れなくなるのだ。

間違いない。これはテレビのニュースで連日取り上げられている眠るように死ぬ怪奇事件、通称 眠りの森の魔女 と呼ばれるものだ。

それはいい。

だが、果たして俺は、ここでどう動くべきだろうか？

少し時間が経つと多少は冷静になれたようで、混乱と焦りが収まってきた。せめてもう少し情報を得よう、と再び覗き込む。

ふと、気付く。周囲に人がいないのだ。ここは閑散とした旧商店街の外れなので、この時間帯でもあまり人を見かける事がない。県が発案したプロジェクトにより新市街区の方へ人が集まり、自然と過疎化していった 歴史を感じさせる鄙びた場所、見捨てられた旧市街区だった。

雑居ビル同士の間、光の差さない路地にいる犯人らしき人物

その姿は誰も見た事がないらしく、謎に包まれた殺害方法からも警察が二週間かけて追っているというのに、未だ明らかな人物像も出回っていない。

ソイツが、居る。

俺が世話になっている探偵事務所の所長が言うには、犯人 魔女と言われている人物は不可思議な現象を起こすという。しかし現代において魔女、魔法使いなど到底信じられるものではないだろう。そういう、不可思議で摩訶不思議、奇妙で奇々怪々な怪事を起こすもの あると信じている方がおかしいと思われる、それ。

断言しよう。そうした怪異は実在する。事実、俺のこの体に宿つてもいる。二度目になるがこんな高校生、やはり他にいないであろう。つまるところこの犯人も浅葱香月も、常識の枠から外れている人間なのだ。

思索から戻り、現状に集中する。状況に変化はない。普通の実行犯なら目的を果たした後、すぐに現場を離れるのがセオリーだ。それを守らないとなると、死体を隠蔽する方法を探していると見て間違いないだろう。所作から人物像を伺う事が出来るかも知れない。強く 興味をそそられる。こんな状況だというのに、口元が歪む。やはり浅葱香月はマトモではない。どうしようもなく惹かれるのだ。俺の体に潜む怪異が、犯罪や異能という危険を求めているのである。俺だけが、それらを読み解く事が出来る故に。

壁の向こう、女性の誰何すいかに体が強張った。誰かいるの、というその言葉に応える程愚かではない。しかしながら不思議である。これ程正直に自分の存在を明かす、悪く言うなら浅慮に問い掛けてくるなど、凡そ噂通りとは思えない行動だ。

聞く限りでは、正体不明の殺人鬼。だがこれでは自分の情報を垂れ流しているようなもの。ならば噂は所詮噂だけのものだったのか。それとも別の理由があるのか。

足音が近づく。音質は軽い。走ってくるのが解る。俺は壁から距離を取り、数歩下がった。周囲にはやはり人が見当たらない 疑問が湧く。何故こうまで人がいないのか。幾ら旧商店街と言っても、

あまりに誰もいなさ過ぎる。疑問。

（姿を見せるつもりか？ 見つからないよう逃げるのがセオリーだが……或いは見られても困らない理由がある？）

裏路地から現れる、上から下まで真っ黒な服を着た成人女性はウエーブがかかった長い黒髪を腰よりも伸ばしており、俯きがちで顔がよく見えなかった。不気味、という第一印象を抱くと、それを裏付けるかのようにダウナーな声音が響く。

「女学生……人払いの術式はまだ機能しているのに、何故」

女は、右手の親指を噛んだ。鬱々と、平坦な声音が続く。

「失敗？ 私は失敗した？ いや、まだ大丈夫。どうして突破されただか解らないけどまだ修正が効く。洗礼は済んだ。消せばいい。目撃者は全員殺す。そうするしかない」

聞いているだけで気が滅入るような調子だった。一人言のようで自己完結している内容の為、割り込むのに勇気がある。こういう手合いは、自分の世界を壊されると何をするか解らない。

心臓が忙しくなりかけるのを必死に留め、言い聞かせる。大丈夫、今まで何度もやってきた事だ、と。俺は強引に感情を押し殺して向かい合う。焦りや恐れという余計なものは、この今役に立つものではない。

「お前があの人を殺したのか？ 現行犯なら警察じゃなくても逮捕出来るぞ。大人しく縛につけ」

恨めしげな目線が、それまで隠れていた前髪の下から送られてくる。

淀んだ瞳に潜む、黒い感情に怖気が走った。怒りや恨み、憎しみが垣間見え、正気と狂気が混在しているようにも感じさせる。退廃的で、排他的な雰囲気だった。

次の瞬間、俺を睨みつけるそれが驚愕に見開かれた。

思わず何かと様子を見てみると、サッと踵を返して駆け出す。逃げるつもりなのだ。考えれば当然。呆気に取られる。間の抜けた声

があがる。魔法のワントンポ遅れた反応と逃走に、完全に虚を突かれたのだ。追いかけてよとする　と、突然肩を捕まれ、その場に留められた。

「待て」

背後を見る。がっしりした手でその身じろぎにも離さない。成人男性だった。ざっと見たところ、二〇歳そこそこだろう。巨漢ではないが、体つきはしっかりしている。

「は、離せ！　何だアンタは、あの魔法の仲間か!？」
太い声が届く。

「魔法？　そこに誰かいたのか？　いや、それよりも」
鋭い眼が俺を射抜く。純粹な日本人のようだが、雰囲気がそこらの一般人とは違っていた。言うなれば刃物のような。緊迫した空気を纏った、黒いトレンチコートの男である。

「お前からは、あの女の臭いがする。詳しく話を聞かせてもらおうぞ」
普通に暮らしていた場合には絶対に身に付かない、戦士の空気に戸惑う。魔法の姿はもう見えなくなってしまった。口惜しさに歯を食いしばるものの、すぐに思いなおす。

……もしかしたら、今はこれで良いのかも知れない。さっきは少なくとも良い流れではなかった。純然たる敵意が向けられていた。襲われる可能性が高かっただろう。あのまま俺まで殺されては元も子もないところだったのだ。

ひとまず、男の話である。内容はまだ見えないが、人相から堂々とした大人の姿勢が窺える。話す価値はありそうだった。

「とにかく離せ。警察に連絡しなくちゃならない。すぐそこで人が死んでいるんだ。アンタ、あの魔法が逃げていくところを見ていなかったのか？」

首を傾げる。

「逃げていくところ？　いや、何も」

ウソをついている様子ではない。タイミングからして視界に入らない筈が無いのだが、やはり、そういった不可思議が働いていたよ

うだ。魔女が言うには人払いの術式だったか。
つまり、俺だけが視えていた。この身に潜む怪異は、やはり俺を
不可思議へと誘う難物であるようだった。

警察署で日付が変わるまで拘束され、事情聴取から解放された深夜である。俺の身元を引き受けてくれている。実の両親は十年前に死去している。愛染探偵事務所の所長と落ち合った。俺は待合室にいた彼へと片手をあげて。

「悪い、今までかかった。やっぱり魔女の人相が解った事は大きいらしいな」

ボサボサの髪を適当に撫で付けたその男性。眼鏡をかけた長身瘦躯の、それこそ押せば倒れるような中年は俺の姿を認め、携帯灰皿に煙草を捨てる。

「や、そりやそうでしょ。今まで何も解らなかつた謎の殺人鬼だからねえ。その最初の目撃者がカツちゃんっていうのも、何かの因果かね？」

俺の体に眠る怪異について言っているのだ。

「かいしき解式の事？ でも、あまりおおっぴらに自慢出来るものじゃないし、これのおかげで棺桶に片足突っ込んでるのに。因果と言われても、あまり良い感じはしないな」

茶色のスーツをだらしなく着た所長の横を通り過ぎ、外に向かう。

「ああ、待つてよカツちゃん」

「カツちゃん言うな」

今まで俺を育ててくれた親代わりの人間に対してこのぞんざいな態度は正直、褒められたものではないのだろうが……今更変えるのも恥ずかしくて出来ないのだ。

頼りない風体というのもあって、どうにもきつく当たってしまう。無論、恩義は感じているのだが、性分であろう。

警察署から出ると、いの一審。夕方に俺を引き止めた黒いトレンチコートの男が正面に立った。今まで待つていたらしい。

「済んだのか？」

見上げる程の身長差から睨まれて　浅葱香月は女学校でも長身な方で百六十センチある　男勝りな口を聞く俺は、やはり女学生としては異端なのかも知れない。

「ああ、待たせたな。それで……話はどこです？　正直、女としては秋の寒空に外で立ち話というのは避けたいんだが」

すると、無愛想な態度とは裏腹に男は街中の光る看板を指差した。「解っている。あそこのファミレスが良いだろう。異論は？」
所長が慌てた。

「ちょ、ちよつとカツちゃん、この人は？　夜遊びはいけないよ、まだ君は子供なんだからね！」

「子供扱いするな、夜遊びなんかしないって。もう一人前なんだから。あとカツちゃん言うな！」

子供の頃から続く愛称なのだが、いい加減恥ずかしいのである。こうして幾度も抗議の声をあげているのだが、慣れ親しんだ慣習というものは簡単に変えられないようで、ついつい口が勝手に言ってしまう、とは所長の言い分。

そこでふと男を見る。

「俺は浅葱香月。香月でいい。こっちは愛染幸助^{あいぜん・こうすけ}。どちらも愛染探偵事務所の者だ。アンタは？」

口籠る様子に、先程までの堂々とした様子は見られない。

「どうした？　何か言いにくい事でも？」
いや、と答えて。

「俺は……伊庭。伊庭和泉守玄之丞吉兼だ」

思わず聞き返す。何かとてつもなく長い名前のようで、聞き取れなかったのだ。所長と上擦った声が重なった事は、無理もあるまい。「いは・いずみのかみ・げんのじょう・よしかね」

男は区切り区切りに、解りやすく発音してくれた。二度目の名乗りに慣れているような　恐らくそういった苦勞がこれまでに何度もあったであろう事を伺わせる態度だった。

昔の基準であれば伊庭は姓、和泉守と玄之丞は役職で、吉兼が名との談である。父親や祖父から一文字、曾祖父から一文字取つてと由来は多くあるようで、結果こんな名前になつたらしい。役職は既に無いので通称に代わっているようだ。

閑話休題。移動先のファミレス、テーブル席にてハツと何かに気付いた所長が瞠目して身を乗り出す。

「伊庭！？ 伊庭つてもしかして、御三家の伊庭！？」

横で大きな声を出された俺は耳を塞いだ。

「音量下げてください、所長……何、その御三家の伊庭つて」

「あ、ああ、ごめんよカツちゃん。ええと、御三家から説明しようか」

それは、ある分野について最も高名な三者を差して言う言葉らしい。近年では自動車メーカーや歌手、日本の中学校から米国の大学などを言うのだが、起源は日本の徳川御三家という。当時は將軍を補佐する役目を負っていたようである。

そして伊庭は、大昔から陰陽術や風水などに関連した、どちらかと言えば表沙汰に取り上げられない裏社会での御三家に数えられているとの話だった。

通称、陰の御三家。

「まさかビッグ・スリー縁の人物に出会えるとは、しかもこんな街で」

唐突に、伊庭が遮る。

「家は関係ない。もういいだろ、止めてくれ」

少し意外だった。立派な家柄だというのに、彼は家の事に触れられたくないのだろう。先に口籠つたのはこれが原因かも知れない。

「所長、謝つて。すまなかつたな、伊庭。こちらに悪気はない。話を進めよう。」

お前は、あの魔女を知っているのか？」

しかし、続く伊庭の言葉に俺は首を傾げる事になる。

「それは どっち の事だ？」

話が、噛み合わない。

「どっち、とは？ 魔女は二人いるのか？」

しかし、伊庭の答えは。

「いや、魔女は一人だけだ」

腕を組む。どういう事だろう。混乱させようとしている、とは思えないが……そうしているとウエイトレスが伊庭にお冷、俺にメロンソーダを運んできたので口を付けた。所長が煙草を吸おうとするのを横からかつさらい、握り潰す。禁煙席である。

「……そうか。つまり、魔女ではない何者が……関係者がもう一人いる、という事か？」

「う……む……」

歯切れが悪い。

「そうかも知れないし、そうでないかも知れない。

逆に俺からも聞く。夕暮れ時のお前からは、俺が知っている術式の残滓を感じた。あれはどういう事だ。お前こそ、あの女を知っているんじゃないのか？」

「あの女とは、誰の事だ？」

魔女か、とも思ったが、彼はその姿を見ていない。明らかに見える位置だったというのに。少し躊躇った後、伊庭は答えた。

「今は異能犯罪者としての烙印を押され、各機関から追われている

……長いウエーブの髪に、

俺は思わず立ち上がった。

「やはり、異能犯罪者！」

すぐに迂闊だったと気付き、手遅れだというのに口を押さえて静かに座る。

「……確か、先頃に女と言ってたな。どういう関係だ？ ちなみに俺はたまたまあの場に居合わせただけで、偶然出くわしたただけだ」

俺から視線を外し、静かに答える。

「……婚約者だ」

この時、俺と所長は鳩が豆鉄砲をくらった顔をしていたと思う。それに構わず。

「なんとしても連れて帰りた。今は、それしか言えない」

「しかし、異能犯罪者となるともう市井に戻るのには絶望的だ。素直に罰を受けさせるべきでは？」

何しろ専門の機関は警察よりも強い権力を持っている。それこそ伊庭を初めとした裏御三家に匹敵するだろう。

「」

好奇心と衝動が湧き上がる。その言葉が持つ魔的な魅力に、俺はすっかり虜だった。

通常の警察機構では対処出来ない、超常現象や霊的な作用現象が人為的な意図性を持って関与したと思われる犯罪行為は異能犯罪と区分されて専門機関に委ねられる。

混乱が起きる為、決して明るみに出してはいけない案件だ。よって、グレーゾーンの探偵がそれを優先的に調査し、専門機関に協力する体制を取っている。

言うなれば尖兵。または斥候。或いは……捨て駒。

危険度は高く、保身を思うなら手を出すべきではない。身に及ぶ危険が凶悪殺人事件の比ではないのだ。事実、この所長も当初はそう言っ手をつけなかった。

キツカケは、俺。

何を隠そう、俺は異能や術式に関して専門家である。プロフェッショナル

「お前、異能犯罪について知っているのか？ 一般人のくせに」

一般人。笑わせてくれる。女子高生探偵を舐めてくれるな。

術式というのは呪いの式だ。人の心が放つ精神言語ゴーストによって周囲の霊子マナに働きかけ、現実グノーシス・エフェクトに霊的作用現象を引き起こす神秘である。

これが悪用される事例も多く、先も言ったがそうしたものは 異能犯罪 と区別されて専門機関が事の処理に当たっている。

ブレザーの胸ポケットから取り出した探偵手帳を相手に見えるように翳す。

「愛染探偵事務所と、浅葱香月の名前を覚えておいてくれ。俺だけが異能犯罪を、本当の意味で解き明かす事の出来る技能を持っている。何かあれば、連絡を」

「ならば、俺からもこれを」

名刺を渡される。長ったらしい名前の横に書いてある漢字の並びに、眼が惹かれた。

「……我謝御霊会？」

それは、異能犯罪を専門的に裁く権利を持った、巨大な組織の名だった。

* * *

翌日、女子高へ登校する道中で、皆が遠巻きに俺を見ていた。特に昨日今日始まった光景ではなく、入学当初からこうした様子は時々見られたが、最近顕著である為、流石に気になってきたのだ。

やはり、探偵というのが興味を惹くのだろう。時に生傷を作ってくる辺り、自業自得なのだろうけれど。流石にまだ殺人事件の第一発見者だとは広まっていまい。所長も未成年だとして伏せるよう警察にお願いしていたし。

しかしながら、俺がどんな状態でも変わらず声をかけて来る物好きが一人いたもので、それは教室に入っつてすぐの事だった。

肩より長い金髪をツーサイドアップにした、碧眼の美少女である。高飛車で常に取り巻きが二人はいる、神崎零子だった。俺から見てもアイドルか女優のようで、実際に街でテレビ出演の声もかけられたという美少女なのだ。

「ああら、浅葱さん。御機嫌よう。今日はいつもより五分程早いのではないくて？ 貴方のようなアブない人が五分前行動だなんて、槍でも降る前兆かしら？」

「ああ、お嬢。いや、昨日変な男と知り合っただけ。あまり寝てないんだ」

「お、男!? 浅葱さんに男性の影が!？」

やおらガタガタ言い出す教室内。視線が集まる。何故ここまで注目されるのか。実際、男性と付き合っている同級生は多い。近くの高校は共学なので、その生徒と　というケースが大半だが、社会人の場合も聞く。

なので、男と街で知り合った程度、どうという事もない世間話の筈なのだが　やはり、嫌われ者はそういった方向でも注目されるのだろうか。居心地が悪い話である。

「お姉様に近づく男性がいるなんて……身分を弁えない殿方もいたものですね」

何やら不穏な声音のヒソヒソ話が聞こえてきた。

「どうしましょうか。ファンクラブの人たちに連絡は?」

内容までは聞き取れない。聞きたくないというのが正直なところだが。

「お姉様、今日もお美しいですわ……」

頭を抱える。視線が痛い。やはり俺は普通の生活を送れないのか。ここまで注目されるとなると、俺に何か不手際があったとしか思えない。しかし　解式　の事も異能犯罪の事もまだバレていないと思うのだが……

「物憂げな表情も艶があつて……」

やはり自業自得だろうか。自分から周囲に歩み寄らずして、何を受け入れてもらつつもりなのだろうか、俺は。そんなだから二年の秋になつても友達一人作れないのだ。嘆かわしい話である。華の女子高生なのに、満足にガールズトークの一つもした事がない。

自慢にしているポニーテールに触れる。青いリボンの感触が、心を落ち着かせてくれた。何度も同じ物を買換えて使用しているのだ。というのも、最初の一号は母の形見なので大切にしまつてあるが。

俺は、今の自分から変わりたいと思っている。けれど何から手を付ければいいのか解らず、同じ場所で足踏みをしてばかりだ。出来る事と言えば、探偵の真似事、神秘への造詣があるというだけ。日常の象徴じみた学校ではあまりにも 異質だった。

「フ、フフ……」

傍らからの不気味な笑い声に顔を向けると、お嬢が俯いて立ち尽くしていた。

「どうした、お嬢」

いつもならもつと気丈夫に振舞うというのに、珍しい様子である。「そうですか、いつかは、と思っていました。がこれ程早くとは……フフフ……」

すると、普段キビキビした動作の彼女からは想像がつかない、幽鬼のように頼りない足取りで席へと戻っていった。口から呪詛のように吐き出される言葉は、周囲の雑音に紛れて聞き取るのが難しい。「牽制、牽制しないと……そうすわ、お昼……お昼にお弁当をダシに誘い出しましょう……あの方、子供味覚だから好みに合うのを今からでも執事パトラーに届けてもらえば……」

お嬢の様子に呆気に取られた俺は、暫し呆然としていた。あれは一体どうした事だろう。嫌味の一つでも飛んでくるかと思っただけだ。そうしていると担任が現れ、何事もなく一時間目の授業が始まった。

学校にいる間くらいは普通の女でいたいと願っても、今のままで叶わぬ願いであると自答し、俺は一つ溜息を吐いた。

第二章 森に潜む狩人

神崎零子 かんざき・れいこ

彼女とは剣道で知り合った仲である。中学時代から剣道小町と称えられていた彼女を、女子高入りたての練習試合でやり込めた事からよく因縁をつけられるようになり、当時は険悪な仲だった。それが軽い調子で会話に冗談を交えられるようになったのは、最近になっての事である。

向こうはどうか知らないが、俺はこのお嬢が好きである。実直で努力家、勉強、運動どちらも学年トップクラスを維持している才色兼備という才媛。県内でも高いレベルであるこの女子高にてその成績を保ち続けるのは並の努力では無理なのだ。それは同じ場所にいる俺が一番良く知っている。

お嬢を例えるなら、白鳥であろう。人知れず努力を重ね、しつかりと結果を出す。常に周囲の期待に答え続け、それに比例して皆に寄せられる信頼が、俺にはとても羨ましく、眩しく見える。

しかし一步引いた視点から見ていると、彼女の欠点も浮き彫りになってくる。一度視点が固定されると、それしか見えなくなるのだ。視野狭窄を起こしてしまいがちな事に、一体どれだけの生徒が気付いているだろう。

果たして今回、それが原因となった。

*

*

*

天気が良いので、昼食は屋上で取る事にした。季節は秋に入りかけた九月の終わり。紅葉し始めた街路樹の並ぶ新市街地を眼下にベロンに座る俺とお嬢、その他数人とで他愛ない会話を肴に過ごす昼休みは、俺にとって新鮮なものだった。

何故か人一倍いきいきとしているお嬢が、膝に乗せていた重箱を自慢げに見せてくる。咳払いを一つして。

「これは神崎お抱えのシェフが作ったお弁当ですわ。最高級の素材を使って調理された、それこそ中身は一流レストランで出されてもおかしくないレベルですの。これを貴女のような貧乏人が食べられる事に感謝して欲しいですわね」

「いや、別に頼んだ訳では」

「でもまあ今回は！ 特別に！ この私の好意で食べさせてあげますわ！ 本来なら神崎以外は口に出来ない高級料理を味わえるのも私のおかげという事をお忘れなく」

今日は舌の滑りが普段より五割増しくらいになっているようだ。やかましい程である。

「いや、だから俺は頼んで、」

「気後れなさるのも無理はありません、貴女のような少々見た目が優れている程度でこの私、学校に多額の寄付をしている神崎財閥の社長令嬢に眼をかけられているなんて、もはや奇蹟と言っても過言ではないのですからね　ま、まあ美点がそこしかないという訳ではありませんけど」

自分を持ち上げまくっているのは別に良いのだが、やっぱり俺は弁当を食べたいと頼んだ訳ではないのである。この流れから考えるに、お嬢は俺にどうしても一緒に食べてもらいたいようだった。

「別に見た目は普通だと思いが。俺くらいの奴、普通にいるだろ」
そこでお嬢は呆れたように首を振った。溜息もついている。素の調子に戻った声音で。

「……気付いておりませんのね」

意味が掴めず、俺は首を傾げるばかりだった。

「ところで浅葱さん、昨日お知り合いになったという男性とは、どこまで？」

興味津々といった様子で詰め寄られ、少し身を引かせた。

「どこまでって何だ、お嬢。携帯の番号を交換しただけだけど、その位は普通するだろ？ お前だって男友達いるんじゃないのか？」

あの伊庭が俺の男友達であるかという否であるのだが。

お嬢の弁当箱　三段重ねの重箱である　に手をつける。美味い。色とりどりの食材が主張し過ぎず、互いに引き立てている様は圧巻の一言に尽きた。しかし隅の方に鎮座するアスパラガスは苦手なので手付かずである。

「え、ええ、それはもう沢山おりますけれどね！　未だ誰にも心を許してはおりませんし、そう簡単に許すつもりもありませんわ！

私の恋人となる人は、私よりも気高くなくては！」

難儀な女である。お嬢の天に届かんばかりのプライドを超えるヤツが果たして人類に存在するだろうか。破滅へと突き進むその根性は認めるが、あまり褒められたものではないだろう。

「そついや剣道部の方はどうだ？　最近顔を出してないけど、皆来てる？」

「それはもう。皆さん一生懸命ですわよ。精神鍛錬の場としても体を鍛える場としても人気の部ですし、それに剣は日本人の心ですからね。自分を見つめなおす良い機会になっているようですわ。皆さんの士気も高いですし。今度の大会では必ずや優秀な成績を修める事でしょう！　そうなれば次期主将としても鼻が高いですわ！　薙刀部なんかには負けませんわよ！」

立って高笑いし始めるお嬢を無視しつつ、彼女の取り巻き　ク
ラスメイトである　に話しかける。

「コイツといて疲れない？」

お嬢のような手合いがいると会話の取っ掛かりに出来て、話題が切り出しやすい。普段話さない彼女の取り巻き達はどうかやら俺が嫌いなようで、会話しようにも余所余所しさが拭えないのだが、今回は思い切って踏み込む事にする。

「ところで最近、何か変わった話とかない？　変な噂っていつのかな」

この話の運び方は我ながら自然だったと思う。やはり探偵としてはあの眠りの森の魔女が気になるし、他にも眼に留まる異常があれ

ば放っておく事は出来ない。手当ては背後にいる異能犯罪の担当機関 ユニオンという がある程度受け持つてくれるので、こうした自発的な調査も認可されている。

何よりもこの問いかけをした大きな原因としては、あの伊庭が話した言葉が引つ掛かっているからだった。

それは どっち の事だ？

曰く、魔女が二人いるのとは違うらしい。ならば魔女ではない何者かがいるという事だろう。そう踏んだ俺は少しでも手掛かりを、と女子生徒達の言葉に耳を傾けた。

お呪いまじなが流行っているという。

少々肩透かしだったのが、聞けば聞く程引つ掛かるものを感じたので調査する事にした。確かに女性は噂や占い、呪いというものに強い興味を抱きやすい。しかしながら流行り廃りの激しいジャンルでもあるので、特に興味のない俺は今まで対岸の出来事に感じていた。だが、お約束事のようなものは時代が流れても不動の法則の如く生き残るようだ。由緒正しい女学校は、長い歴史を誇る故にその実績も維持されるものであり また、同様に人の心を強く揺り動かす怪談というものが脈々と受け継がれてきていた。

深夜の教会で怪人に会つと、願いが叶う

これには腑に落ちないものがある。願いが叶うという安易な言葉に縋る輩が必ず出てくるのに、しかし教師連中が特別意識して注意を呼びかけている訳ではないという事だ。あまりにも甘い話に誘惑され、願いが叶うというそれを悪用する者がいてもおかしくはないというのに。しかし俺が今までこの話を知らなかった点、そこまで大きな噂になっている訳ではないようである。こういう手合いの話はやはり、裏を疑うべきであろう。

言つてしまえば、人に良いように働く怪談というのは珍しくない。座敷童ざしきわらしが筆頭にあげられるが、しかしそういった場合はもっと大々的に話され、それこそ誰でも知っている位に広まっているものでは

ないのか。

この話が女生徒の間だけで噂され、誰でも出来る呪いとして認知されている理由があるのでは、と。俺はそう疑ったのである。

その直感は正解だった。まじないとは呪いと書く。人を呪^{のろ}う、呪詛にも為り得る概念を内包したもの。それが罊であつたと判明するのは、もう少し後の話になる。

* * *

女学校の制服は紺のブレザーとスカートに、指定のタイツと革靴だ。俺はちよつと違反してガーターを着けているが、これは何も背伸びしての事ではない。

スカート下に武器を隠せるのだ。女にしか出来ない携帯方法であり、流石に持ち物検査でもスカートを捲り上げるような調べ方はしない為である。アクションやスパイ映画でも良く見る手法だ。着替えの時は少々苦勞するが。

左と右の太腿外側に、片刃ナイフを仕込んでいる。背に鋸^{セレーション}刀も備えた刃渡り十五センチのコンバット・ナイフとなっている。これは二つの背を合わせて合着させ、刀身中央にスリットの入った大型の^{ソードブレイカー}刀剣砕きとしても使用出来るのだ。

正式名称は、^{つみきり}罪斬の陰と陽とされている。

量産モデルではなく、名のある刀工による霊的な作法で打たれたワンオフモデルで、異能犯罪に携わる俺へと与えられた、神秘を断つ為の媒体である。

浅葱香月の探偵七つ道具が一であるが、こうして考えるとどうにも物騒な探偵であつた。

閑話休題。

噂の真相を調べようと思い、放課後に校内を巡回していると、近くの教室から女生徒の怒鳴り声が聞こえてきた。何やら複数人で一人を攻撃している様子だ。

近付くと、聞くに堪えない言葉が耳に届いてきた。ムカつく、気持ち悪い、魔法の癖に　そんな調子で攻撃いやさ口撃が続いている。足が向く。そう、俺の興味を惹いたのは魔法という単語だ。まさかとは思うが眠りの森の、ではあるまい。しかしながら関係者ではないと断定する要素もない。疑うべきであろう。

ちなみに街へ出て昨日の事件の調査をしていないのは、昨日の今日でそう大きな動きを見せる事はないだろう、と嵩を括ったの事だ。そんな迂闊な人物ならとうに警察に捕まっているか、少なくとも正体を突き止められている筈である。組織ぐるみの疑いがある事から、事前に情報を集める必要もあるだろう。今、迂闊に動けば向こうに警戒される心配もあった。

ひとまず眼の前の教室へと入り、隅の方にて個人を罵倒し、威圧している三人へと声をかけた。

「何をしてる」

ああん、と口汚く答えて振り返る、茶髪の女生徒とそれに似た風体の取り巻き二人。その間から視線を通すと、小柄で大人しそうな生徒が怯え、竦んだ様子で縮こまっていた。

到底、魔法には見えない。昨日の人物とは体格から違う。異様に髪が長い点は気になるが、個性であると思えば見逃せる。

長い歴史を持つ県内有数の女子高と言っても、こうした問題は後を絶たない。逆に異性の目がない分、女同士の方が陰湿でしつこい面がある。人が集まる閉鎖的な環境では、尚更であろう。

「苛めか……恥ずかしいと思わないのか、格調高いこの学校でそんなみつともない事をするなど。しかも複数でよってたかって」

すかさず反論する茶髪ボブカットの生徒、追隨する取り巻き。

「んだよ、オメーには関係ねえだろ！」

「スカしてんじゃねえよ、クソ」

「消える売女^{ビッチ}」

内心、一つ溜息を吐いた。同じ女として嘆かわしい限りである。

「そのネクタイは二年生だな。同学年の生徒を関係ないとは言い切

れまい。それに廊下まで聞こえているぞ、お前達の声は。聞いたところから察するに彼女が気に入らないようだが、それなら一方的に責め立てるのではなく改善するよう頼むとか、もっと穏便なやり方があるだろう。仮にも名のある学校の生徒だというのに、どうしてそれも攻撃的なんだ」

これには、部外者は黙ってる、知ったふうな口聞くな　と返された。嘲笑混じりで、蔑む視線がぶつけられる。

茶髪の生徒が俺の脛すねを蹴ろうと足を振り出したが、大体そんな事だろうと予想していた俺は　こうした攻撃は生徒の間でも手軽な嫌がらせとして通例である　横に一步動いて回避した。

再び蹴ろうと片足立ちになったところで軽く胸元を押してやると相手は尻餅をついて倒れる。正直、無益だった。

「茶髪の生徒。お前の顔は覚えた、これ以上続けるなら、今度は攻撃するぞ。」

少し考えれば解るだろう。苛められる方は痛いんだよ。嫌なんだよ。自分がされて嫌な事は人にするなって小学生の時に教わらなかったか？　いつか、それは自分に返ってくるぞ」

少しの間、不穏な空気が漂った後、彼女は取り巻きに耳打ちされて立ち去っていった。その際に舌打ちを聞こえよがしにしたのは、捨て台詞の代わりであろう。

俺は縮こまっていた少女へと向き直る。

「大丈夫か？」

改めて見ると、長い前髪に顔が半分以上隠れていた。腰まで届く長髪は艶やかな黒、ほっそりとした体型は小柄で俺よりも頭一つ分は小さく思えた。掠れる程に小さな声が耳に届く。

「あ、あの……どうも、助かりました」

「いや、俺が勝手にやった事だ。余計なお世話だったら謝罪する。ところで」

「魔女というのは、どういう事だ、と。」

答えるように前髪のカーテンから覗かせた眼は、くりくりとして

いて一目で美少女であると解った。綺麗というよりは可愛い系で、怯えを滲ませるつぶらなそれは子兎を思わせる。

「わ、私、その……良くない事を呼ぶ、体質で……」

すぐさま直感した。生まれ付き不幸や災厄を呼び寄せる人間がいるというのを文献で見た事がある。

「不幸体質か。または、霊媒体質？」

それは、居るだけで己と周囲に禍を呼ぶというものだ。彼女の意志に関係なく、問題を起こすのであろう。だから、先の三人はそれを気味悪がって責めていたのか。

「あ、はい……だから、私には近付かない方が良いと思います……」
不幸を呼ぶ女。成る程それが魔女と呼ばれる由縁である。しかしこのまま見逃すというのは忍びない。彼女は何も悪くないのだ。問題を起こそうとして起こしているのではない。なのに耐えている。じつと、他者を恨むような眼もせず、呪詛を吐く事も無く。それはまるで呪いでさえあるだろう。

俺ならば、それを解き明かす事が出来る。

「待て。まだ話は終わってない。俺は浅葱香月だ。君の名前は？」

「さ、早乙女さおとめ・イチ一といいます……浅葱、さん？」

彼女が澄んだ瞳を覗かせる。

「もしかして、剣道部の……？」

「よく知っているな。お嬢繋がりで変な噂でも聞いたのか」

「い、いえ。入学してすぐの、剣道部員を全員倒してしまった事件で……知りました」

それか、と頭を抱える。俺はこれでも剣術道場に通っていた身である。男ばかり、それも猛者が犇き合う道場でしごかれて来たので、入学当初は殺気立っていたのだ。しかも剣となると負けたくない一心で事に当たった為、俺としても望まない結果が生まれてしまった。そうして現在に至っても友達が一人もない孤独な学園生活を送っている事の顛末となる。

はつきり言つて、我ながら愚かだった。周囲が遠巻きに見るのも自業自得そのものである。

両掌を合わせ、拝むように言った。

「頼む、忘れてくれ。俺としてもあれは望んだ結果じゃなかったんだ。ただあの日は、連日勧誘の声をかけられて苛々してて、その捌け口にしてしまったというか……」

微かに笑う声が出た。今度ははつきりした声音が耳に届く。

「思っていた程、怖い人ではないんですね。誠実そうで安心しました」

でも、と。

「やっぱり、私には近付かない方が良いでしょう。貴女を不幸にしたい。ない。」

私は、魔女ですから」

寂しげな表情で、夕陽を背にそう語る　陰のある美少女は、自ら孤独を望んでいた。

場所を変え、校庭を見下ろせる場所にあるベンチに早乙女を座らせた。次いで隣に腰を下ろす。背後には花壇の間を通る遊歩道が右から左に伸びている。ここから左に行けば緑のトンネルやバラ園も見受けられる、生徒達にも談笑の場として人気が高い遊歩道だった。尤も、秋の寒空の下ではその人気も凍えている昨今だが。

拒絶しようと壁を作るこの生徒を無理やり連れてきた為だろう、不安げな視線が心に刺さる。

「あの、浅葱さん。お話というのは……？」

「君の不幸体質についてだ。それ、治せるかも知れない」

彼女は瞠目した。まるで信じられない事を聞いたようだった。

「な、治せるって……ウソ言わないでください。お医者様の治療も神社のお祓いも効果がなかったんですよ、生まれてからずっとなんです。何人も傷付けてきたんです。何度も傷ついてきたんです。それを、今更……」

絶望している言葉の内容とは裏腹に、疑い半分、期待半分という眼。それに彼女が長い間、深く悩まされてきたその片鱗を見た気がして、俺は何かしなくてはと決意する。

傷は治るものだ。疑いは真実によって晴れるものだ。

そして、絶望は希望によって癒されるものであるべきなのだ。

「そんな対処法ではダメだ。異能というのは、一種の怪異なんだよ。覚えておくといい。この世には、常識では及びもつかない怪異が存在する。」

その一つが、君の持つその異能、不幸体質だ」

異能は必ずしも人間に対して有益を齎すものではない。こうして自身やその周囲に害を及ぼすものだって当然のように存在するのだ。

「怪異？ 異能？」

「ああ。ある程度情報を提示する事は可能だが、今それは必要じゃない。ただ、そういうモノがあると理解してくればいい」

A・ヘクター博士が提唱したヴァルプルギスの定義によれば、異能は精神の深奥、ゴースト心理的元型マスター・ピースと呼ばれるものが原因となって表面化するという。

その人間のみが得られる能力を、異能 専門用語では天恵ギフトと呼称するが、こちらは一般の意味でのギフト 贈り物と混同されてしまう心配から、あまり好んで呼ばれない。

端的に言えば、心理的元型が発する心界言語テトラコードにより、異能は実現化される、という話である。

尚、これらは先日見た殺人事件の霊的作用現象とは概念が異なる。こちらは異能、あちらは術式だ。分野にして国語と数学くらいの違いがある。

ちなみにあの時の青い粒子群は術式発動後の残滓であり、何らかの事象変移が行われた軌跡となっている。

何かが、引つ掛かる。そうだ、基本的に術式は同時に使用出来ない。対消滅現象が起きて相殺されてしまうのだ。そもそも術式の並列処理、デュアルキャストが行われていたとしたらその時点で

俺が気付かない筈がない。それだけ大きな兆候がある。

つまり、人払いの術式と、殺害を目的とした術式があつた場で使われていたが、それにはデュアルキャストの兆候はなく、且つ対消滅現象を起こさず、二つの術式が存在していたと……？ 理屈が、通らない。

考え込んでいると、横から声がかつた。すっかり自分の考えに没頭していたようである。

「すまん、少し考え事をしてた。それじゃ、術式を」

俺の持つ 術式 とは、言わばサイコメトリー能力である。能力の範囲は厳密に定義されている訳ではないが、主な特徴として超感覚的知覚《ESP》の感応能力とされている。解りやすく言うなら、対象から直感的に情報をキャッチする力だ。

例えば遺留品から残留思念を読み取り、その時の行動や居場所を解明するというように使う。

だが術式と呼ぶ手前、それだけではないのである。読み取るだけでなく、解く事が出来るのだ。呪いや思念、異能を解読し、解き明かし、そして 解を導き分解する。

「始めよう」

だが、直前。最悪であり最高のタイミングで、邪魔が入つた。

男の声。

「無理だよ、それは。止めたほうがいい。止めるべきだ」

背凭れの後ろ、遊歩道の、その向こうに人影があつた。

黒いマントとシルクハット。顔は帽子に隠れて口元しか見えないが、その口元も奇妙なもので覆われていた。

男 シルエットと声から判断した が顔をあげる。白い仮面 だった。道化師の、奇妙な笑いが描かれた 仮面。

気配も前兆も脈絡もなく現れ、不気味さを醸すそいつは、道化師か魔術師か、はたまた怪人か。

そつ、確か。教会の怪人は、願いを叶えてくれる……だったろうか？

「彼女の仮人格ペルソナと単一概念になっているんだ、それはね。鍵を
持たぬ者が安易に人の精神へと手をかけるべきではない。それは神
への冒瀆だよ。意味が解らない君ではないだろうか？ 浅葱君」

既に立ち上がっていた俺は言葉を返した。

「どうして俺を知ってる。お前は誰だ」

本来なら不審人物として警察に連絡しても良いくらいなのだが、
どうも こちら側 の人間である事を臭わせる言葉に、様子を
見る事を余技なくされる。

しかし怪人の方かというと、そうではなく。

「見るといい」

そう言い、右手を突き出すと奇妙な現象が起こった。俺としては
見知ったものだ。

幻想的で神秘的に、右掌を中心に描き出される円状の紋章があっ
た。半透明で燐光を放ち、光の粒子 霊子マナが周囲に漂い始める。

俺はそれに度肝を抜かれた。本来ならば秘匿すべき紋章技術を、
突然これ程おっぴらに使用してみせるなど、まさかにも想像も出来
なかつたのだ。

「術式クラフト！？ こんな場所！？」

怪人の、見えない口元が歪んだ、気がした。

砲弾の如き勢いで光の塊が発射される。向かう先は俺 では、
なかつた。

隣にいる彼女、早乙女だ。刹那の間、連続的に不意をつかれた事
で動けない俺は、呆然とそれを見ている事しか出来なかつた。

だって、突然怪人が現れて、そいつが実は術式使いで、しかも何
の躊躇もなく攻撃してくるだなんて 何をどう考えても、至らぬ
答えだつたのだから。

しかし、幸運な事に、まるで奇蹟のように。

「えっ？ え、あ ！？」

早乙女はベンチの前脚に突っかかって、転んだのだ。当然、怪人
が放った光の砲弾は彼女に当たらず、その上を通過し、少しして消

滅する。

緊張していた全身が一気に弛緩し、深く息を吐き出す。ソワリと全身の毛穴が開く感覚も治まり、寄せた眉根が緩む。早乙女の死を目の当たりにするという最悪の事態は防がれ、内心胸を撫で下ろした。

冗談のような出来事だ。まさか彼女は運動音痴なのだろうか。だとしても、これは僥倖に過ぎた。ケアレスミスが命を救うなど、奇蹟以外の何物でもない。

しかし、続く怪人の言葉は俺を驚愕させる。

「彼女は不幸体質と同時に、最高の幸運を持っているのさ。呼び寄せる不幸は、彼女にだけは害を及ぼさない。及ぼせない。だから、誰も彼女を殺せない。

凄いものだろう？　しかし、これでは願いを果たせなくてね。困っているんだ」

戦慄を隠せない。言葉そのものは聞き取れたが、俺の頭は理解するのに少しだけの時間を要した。

この怪人は、早乙女を殺そうとしている。

何の変哲もない学校の片隅で、忍び寄る非日常の足音に、俺は好奇心と恐怖心がない交ぜになった、奇妙な板挟みの気持ちを抱くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4533x/>

真昼の月が見える場所で

2011年11月22日03時10分発行